

2024年7月21日（聖霊降臨後第9主日、特定11、B年）

牧師メッセージ

「イエスの憐れみ／わたしたちの応答」

（マルコによる福音書6：30-34、53-56）

司祭ヨセフ太田信三

今日の福音は、先々週の福音で宣教の旅に派遣された弟子たちが帰還したところから始まります。イエスは彼らに「さあ、あなたがただけで、寂しいところへ行き、しばらく休むがよい」と言い、休息を勧めました。しかし、彼らは結局休むことはできませんでした。休息のために出掛けた先にまで群衆が押し寄せてしまったからです。その群衆を見て、イエスは深く憐れみます。

そしてイエスは、（新しい聖書日課＝本日の福音ではこの箇所は省略されていますが）先程は休息を指示したのに、今度は「あなたがたが彼らに食べ物を与えなさい」と指示をしました。結果、休息のはずが供食になってしまいました。疲れ勝っていた弟子たちには、「あなたがたが彼らに食べ物を与えなさい」という指示は、耐えられないほどの重りをズシリと載せられたように感じられたことでしょう。しかし、彼らはその指示に従い、この弟子たちによってパンと魚が配られると、すべての人が食べて満腹しました。12のかごに溢れたパンと魚は、12人の弟子たちまでもが満たされたことを暗示しています。つまり、群衆も弟子たちも、この供食を通して満たされたのです。すべての人を満たしたのは、イエスの深い憐れみと、弟子たちの手を通して溢れ出た神からの祝福です。結局休息を得られなかった弟子たちですが、彼らは肉体的にも霊的にも満たされることになったのでした。

さて、新しい聖書日課ではこの有名な供食の場面は省かれ、供食の前のイエスの「憐れみ」と、供食を通してその「憐れみ」を受け、神の愛を感じた人々の姿がフォーカスされています。先々週の福音、イエスが故郷で敬われない、という記事にもあることですが、イエスの業を通して神からの恵みや愛を受け取るには、受ける側の「信仰」が求められます。神との関係はいつでも相互なのです。神はいつでも手を差し伸べており、それを握り返すならば、そこに恵みが溢れます。しかし、それを無視したり、拒んだりしては、そこに恵みを感じることはできません。もちろん、神にはそんな人間の頑なさを壊すことだってできるのですが、神はいつでも（イエスがそうであったように）わたしたちの主体的な応答に委ねるのです。それはアダムとイブの時から変わることはありません。手を差し伸べ、握り返す。この相互の、本当の意味での愛の交わり、そこにこそある本当の意味での愛に生きる喜びへと神はわたしたちを招いています。

今日の福音の後半はまさに、イエスの憐れみに触れ、その喜びを知った人々の姿が溢れています。病にある人や、弱っている人をイエスのもとへ連れて行こうと駆け回る人々の姿は、まさに神の愛に触れた人々の喜びの姿です。わたしたちもまた、この人々のように、神の愛に触れ、信仰の喜びの中を生きていくことができますように。